

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安京冷然院跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇五 一六

史跡旧二条離宮 (二条城) ・平安京冷然院跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮 (二条城)・
平安京冷然院跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できるとなります。

このたび公共下水道管布設工事に伴う史跡旧二条離宮（二条城）・平安京跡・二条城北遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

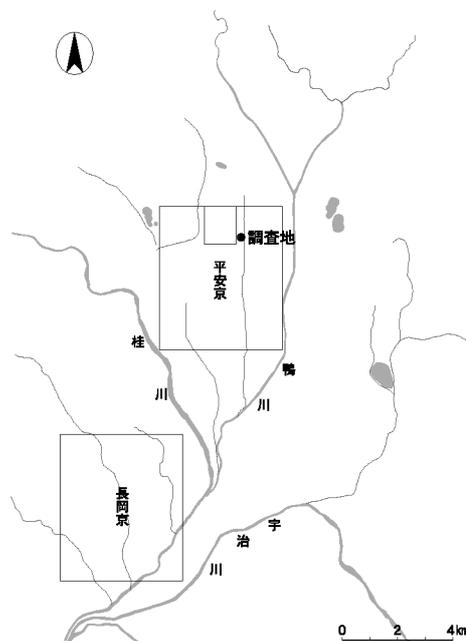
平成18年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮 (二条城)・平安京冷然院跡・二条城北遺跡
- 2 調査所在地 京都市中京区竹屋町通堀川西入二条城町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次
- 4 調査期間 2006年1月6日～2006年3月1日
- 5 調査面積 38m²
- 6 調査担当者 尾藤德行
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「聚楽廻」「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系(改正前)平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の土器類・瓦類の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 尾藤德行
- 17 編集・調整 児玉光世
- 18 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の環境と周辺の調査	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	4
(1) 基本土層と遺構の概要	4
(2) 第 1 面 江戸時代末期から明治時代	4
(3) 第 2 面 江戸時代前期から後期	7
(4) 第 3 面 鎌倉時代から室町時代	7
(5) 第 4 面 平安時代	8
(6) 第 5 面 平安時代	9
4 . 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	11
(3) 瓦 類	12
5 . ま と め	12

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 1 面全景 (東から)
		2	第 3 面全景 (東から)
図版 2	遺構	1	第 2 面全景 (西から)
		2	北壁断面
		3	第 5 面全景 (西から)
図版 3	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 400)	2
図 3	調査前風景 (西から)	3
図 4	作業風景	3
図 5	二条城と埒の柵列 (明治頃の絵はがき、南東より)	4
図 6	北壁・東壁・西壁断面図 (1 : 50)	5
図 7	第 1 面遺構平面図・柵列断面図 (1 : 50)	6
図 8	第 2 面遺構平面図 (1 : 100)	7
図 9	第 3 面遺構平面図 (1 : 100)	8
図 10	第 4 面遺構平面図 (1 : 100)	9
図 11	調査 6 - 試掘 2・3 区平面図 (1 : 200)	9
図 12	第 4 面東半 溝 90 (西から)	9
図 13	第 5 面遺構平面図 (1 : 100)	10
図 14	土器実測図 1 (1 : 4)	11
図 15	土器実測図 2 (1 : 4)	12
図 16	軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	12

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	10

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安京冷然院跡

1 . 調査経過

京都市中京区竹屋町通堀川西入二条城町地内で、西堀川4号分流幹線(その3)公共下水道管布設工事の計画が持ち上がり、縦坑部分の発掘調査を実施することとなった。調査位置は二条城の北側で、今回は2002年度、2004年度に続く3次調査で、2002年度のA区から約130m東に位置する。

調査地は二条城の北東に位置し、江戸時代には二条離宮(二条城)内にあたり、平安時代には、平安京左京二条二坊六町、冷然院北東部に該当する場所である。また、縄文時代から弥生時代の集落跡の二条城北遺跡の南端に位置する。

発掘調査は、2005年12月26日に準備行程打ち合わせ、2006年1月6日調査現場事務所設営、調査区設定、10日から道路占有、道路白線引き直し、カッター入れ、フェンス囲い工事、アスファルト撤去などの工事を行い、12日から重機で盛土を搬出し、調査を開始した。調査面積は南北

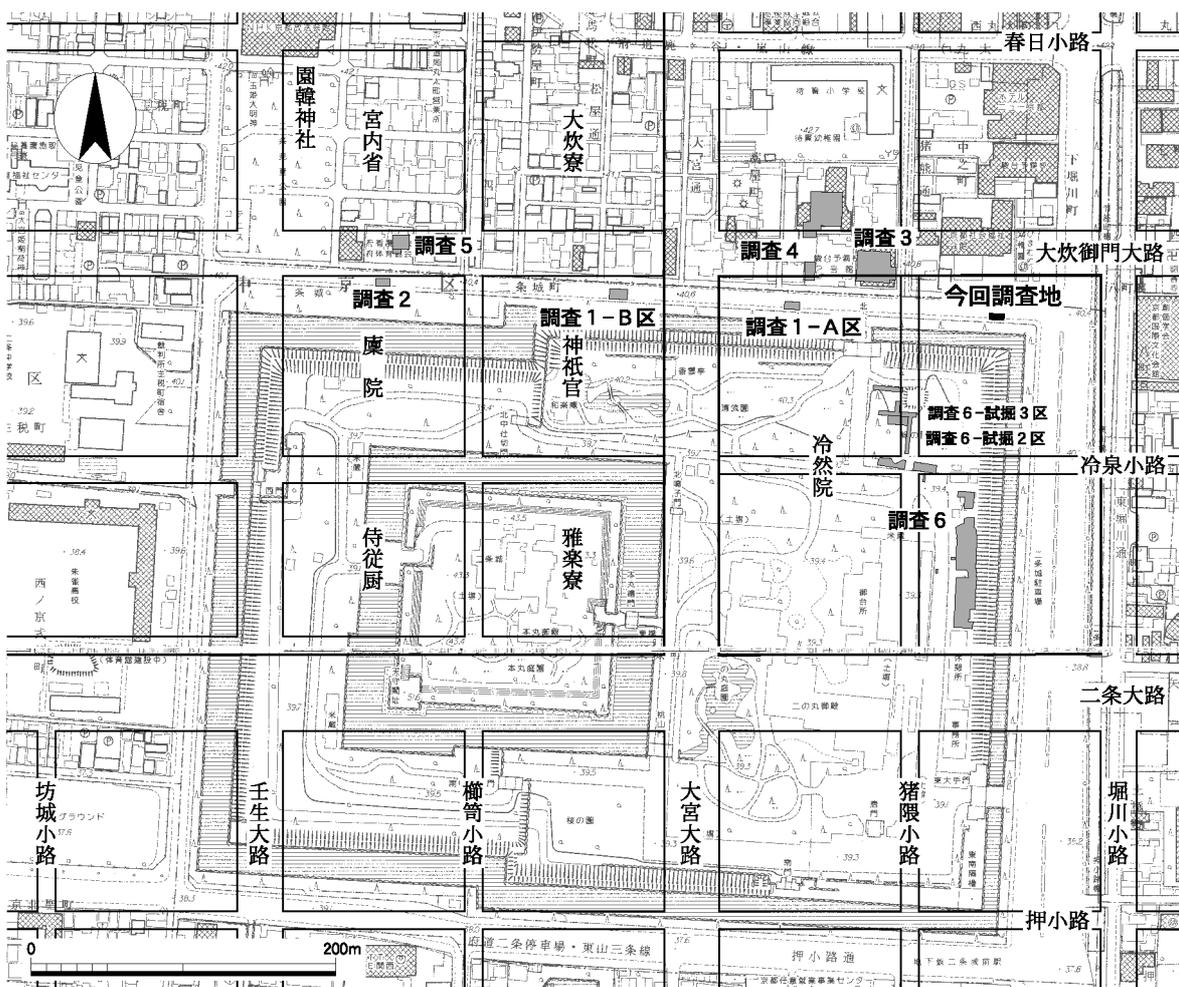


図1 調査位置図(1:5,000)

約3.9m、東西約9.8mの約38㎡である。調査は、堅く締まった近代の路面を重機で撤去し、幕末から明治期の面で遺構検出、写真撮影、実測作業を行い、順次、下層の調査を進め、最後に、断ち割り調査を行い、2月13日に調査を終了した。調査終了後、道路復旧の工事を行った。28日までにフェンス囲い解体・道路占有解除・道路白線の引き直し工事を行い、3月1日には現場事務所を撤去して全ての調査を終了した。

2 . 遺跡の環境と周辺の調査

(1) 位置と環境

二条城は、徳川家康によって慶長8年(1603)に築かれた城で、昭和14年(1939)史跡に指定され、平成6年(1994)には世界遺産に登録されている。安土桃山時代には、調査地の北方に豊臣秀吉が創建した聚楽第と、それをとりまく武家屋敷があったとされている。また、平安時代には、冷然院という平安京左京二条二坊三町から六町までの4町分の敷地をもつ後院として知られている。今回の調査地は、冷然院の北東に該当する場所で、北辺部の建物や庭園関係の遺構の検出が期待された。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では多くの調査が行われている(図1)。2002年度の1次調査¹⁾(調査1)A区では、大正・明治・江戸時代の路面・側溝・柱穴、二条城以前の土取土壌、平安時代前期の遺構や整地

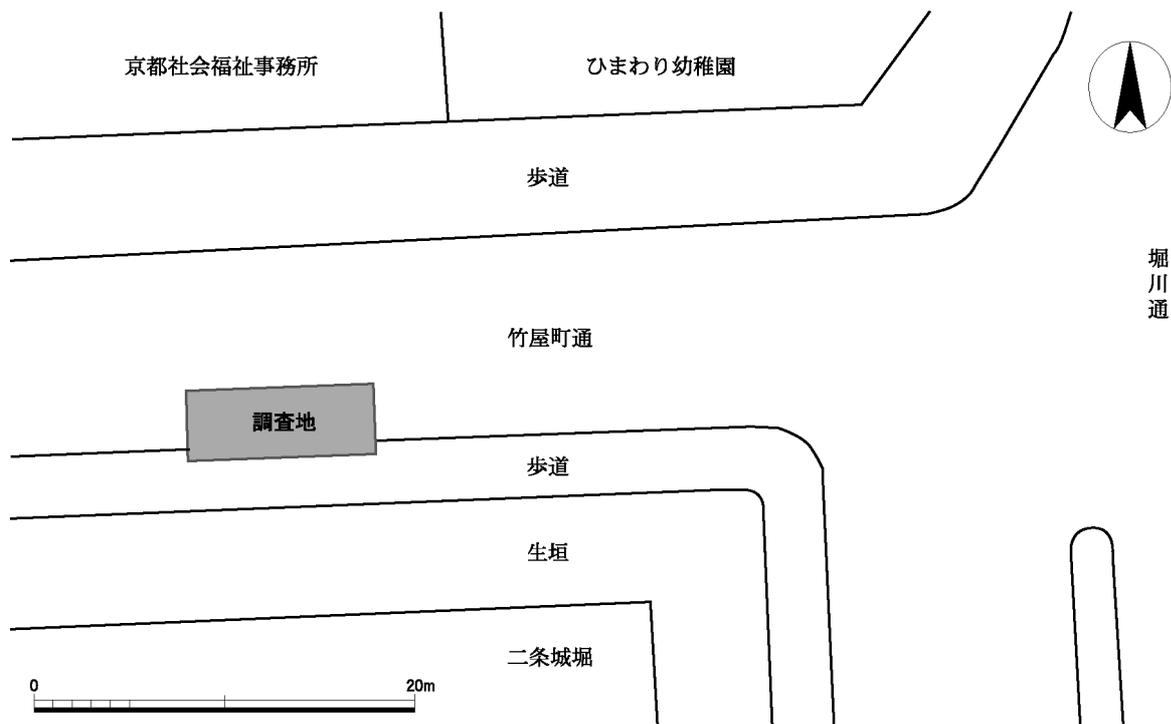


図2 調査区配置図(1:400)



図3 調査前風景（西から）



図4 作業風景

層などを検出し、B区では江戸時代の路面と柵、桃山時代の溝・土壇、鎌倉時代の井戸などを検出している。さらに西方の2004年度の2次調査²⁾（調査2）では、江戸時代前期から後期まで続いていたと考えられる路面・溝・石列・2組の柵列を検出し、その下層で、江戸時代前期・二条城拡張工事以前と考えられる路面・建物を検出したが、江戸時代以前の明確な遺構は検出されなかった。また、1982年度の発掘調査³⁾（調査3）では、平安時代の大炊御門大路の路面と南側溝、冷然院北側築地の内溝を検出し、1994年の調査⁴⁾（調査4）では、弥生時代の溝、平安時代の大炊御門大路南北側溝と築地内溝、江戸時代の京都所司代の遺構を検出している。2001年度の平安宮宮内省跡の発掘調査⁵⁾（調査5）では、江戸時代の溝・柱穴・井戸・土壇、桃山時代の溝、平安時代の土壇・溝などを検出している。

2000～2001年度の二条城内の試掘調査と発掘調査⁶⁾（調査6）では、江戸時代の整地層・土壇、室町時代の溝、冷然院関連の平安時代前期から後期に至る景石群を伴う池状遺構を検出している。また、調査6-試掘2・3区では池状遺構とそれに伴う遣水遺構を検出している。

このように、調査地周辺の変遷を示す資料が発掘調査によって得られており、今回の調査も二条離宮跡にあたる江戸時代と、平安時代の冷然院跡北東部に該当する地域での建物や庭園関係の遺構の検出が期待された。特に調査1や調査3を参考に、二条離宮や冷然院跡に関連する遺構などを主眼に、文化庁や京都府・京都市の指示を仰ぎながら調査を進めた。

表1 遺構概要表

時代	遺構
平安時代	第5面：柱穴、土壇 第4面：柱穴88、溝99
鎌倉時代 ～江戸時代初頭	第3面：土壇77、柱列3（柱穴66・74～76）
江戸時代前期 ～末期	第2面：路面29、落込134
江戸時代末期 ～明治・大正期	第1面：路面6、溝3・4・7、柵列1・2（柱穴8～14、16～19）

3. 遺 構

(1) 基本土層と遺構の概要 (図 6)

基本土層 (図 6) は、地表面より - 35cmまで現道路のアスファルト・砕石層、 - 40～45cmが明治から大正期の竹屋町通の旧路面 (図 6 - 2 層) と考えられる。 - 45～50cmで江戸時代末期から明治にかけての路面 6 (図 6 - 3・4 層) (第 1 面)、 - 60～82cmまでが路面 6 の構築土層で、江戸時代末期以降に盛土された。 - 75～80cmまでが江戸時代前期から後期の路面 29 (図 6 - 10～13 層) (第 2 面)、 - 78～82cmまでが鎌倉時代から室町時代の整地層 (図 6 - 21～23・40) (第 3 面) へと続く。 - 82～88cmは平安時代の整地層 (第 4 面)、 - 88～110cmは平安時代の整地層 (第 5 面) と思われる。 - 110～160cm以下は無遺物層で礫の多い黒褐色砂泥層、黄褐色砂泥層などとなり、二条城北遺跡に関連する遺構・遺物は検出できなかった。

調査区は史跡旧二条離宮 (二条城) にあたるため、1次調査A区を参考に、明治・大正期の路面より調査を開始したが、非常に堅く締まっていたため掘り下げには機械力を用い、次の江戸時代末期から明治にかけての路面の調査に移行した。各土層の堆積状態は、東西にほぼ水平で、南方に少し低く傾斜していた。これは、1次調査のA区と似た堆積状況である。

(2) 第 1 面 江戸時代末期から明治時代 (図 7、図版 1 - 1)

第 1 面で検出した遺構には、調査区の北側全面で検出した路面 6 がある。1次調査のA区のように江戸時代末期の19世紀中頃から明治時代にわたる道路敷きで、路面に伴い南側には東西方向の溝 7・3・4、溝の南側には0.9m間隔で11基の柱穴 (柵列 1・2) を検出した。

路面 6 標高40.3mで検出した路面の構築方法 (図 6) は、7～4層および37～35層を北東より南西方向に盛土していった。1次調査のA区と異なり上下の路面より礫が大きく、厚い路面である。構築土層 (図 6 - 3～7層、35～37層、43～46層) からは江戸時代末期・19世紀中頃の遺物が出土した。



図 5 二条城と埴の柵列 (明治頃の絵はがき、南東より)

溝 4 (図 6 - 34層) 幅約0.7m、深さ約0.2m、検出した長さ約10mを測る。江戸時代末期から明治時代の路面 6 (断面図 3・4 層) に伴う側溝と考えられる。遺物の出土は少ない。溝 4 を改修した溝 3 から「明治三十年」の五銭銅貨が出土しており、溝 4 は江戸時代末期から明治時代後半まで使われていたものと考えられる。

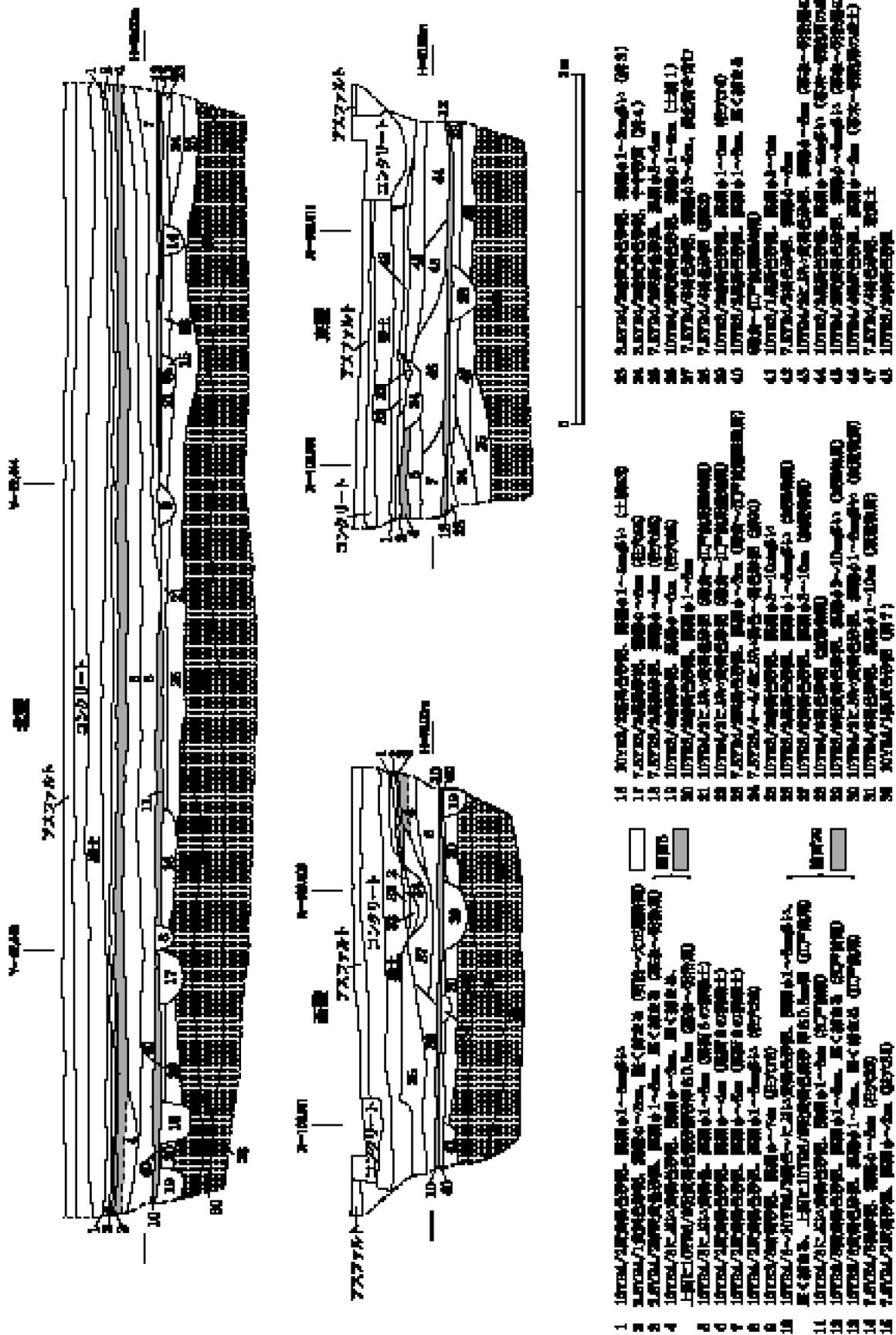


図6 北壁・東壁・西壁断面図(1:50)

柵列1・2（図7） 柱穴の深さの違いから1.8m間隔の柵列1・2と分けられるが、同時期に0.9m間隔であった可能性もある。柵列1は、柱穴16・11・9・13・14・18で約1.8m間隔で、調査区外に続く。柱穴は直径約0.5m、深さ約0.3mとやや深い。柵列2は、柱穴12・10・8・5・17で約1.8m間隔で、調査区外に続く。柱穴は直径約0.5m、深さ約0.25mと浅い。柵列1・2には時期差があると思われるが、切り合いはない。これらは1次調査で検出された埒跡である。図5の絵はがき資料のように明治頃には、二条城の廻りに埒がある様子がわかる。

（3）第2面 江戸時代前期から後期（図8、図版2-1）

第1面から0.35m掘り下げて第2面を調査した。調査区全域で、路面29を検出したが、側溝や埒跡はなかった。2002年度調査や2004年度調査では江戸時代前期の路面と側溝、埒の柵列が検出されたが、当地では、調査区全域が、ほぼ水平の路面層と、中央北側から南東方向に低くなる溝状のわずかな落込134を検出した。

路面29（図6-10～13層） 標高39.95mで検出した。厚さ約0.05mで堅く締まり、上面には化粧砂と思われる厚さ0.5cmの微砂層がある。遺物が無く、時期は不明であるが、1次調査A区を参考にすると、江戸時代前期の寛永3年（1626年）後水尾天皇の行幸に備え、二条城が西へ約1町半ほど拡張されて、現在の二条城の規模になった時の路面の可能性が高い。江戸時代末期以降に第1面の路面が造成されるまで、補修しながら200年以上使われてきたものと思われる。その後、第1面が造成されるまで使用されたものと考えられる。

落込134 幅約1m、深さ0.02m程度のわずかなくぼみで、約6m検出した。ほぼ水平な路面29を調査区中央北側から南東方向に向かって0.05m傾斜している。側溝がないため、雨水で自然にできた可能性がある。

（4）第3面 鎌倉時代から室町時代（図9、図版1-2）

第2面の路面を掘り下げた第3面（図9）では、路面のように堅く締まった整地面（図6-21～

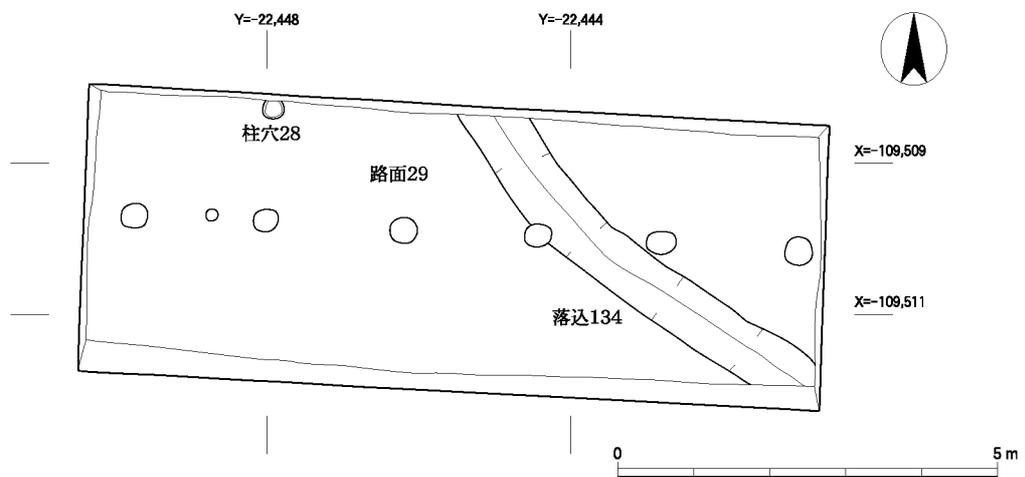


図8 第2面遺構平面図（1：100）

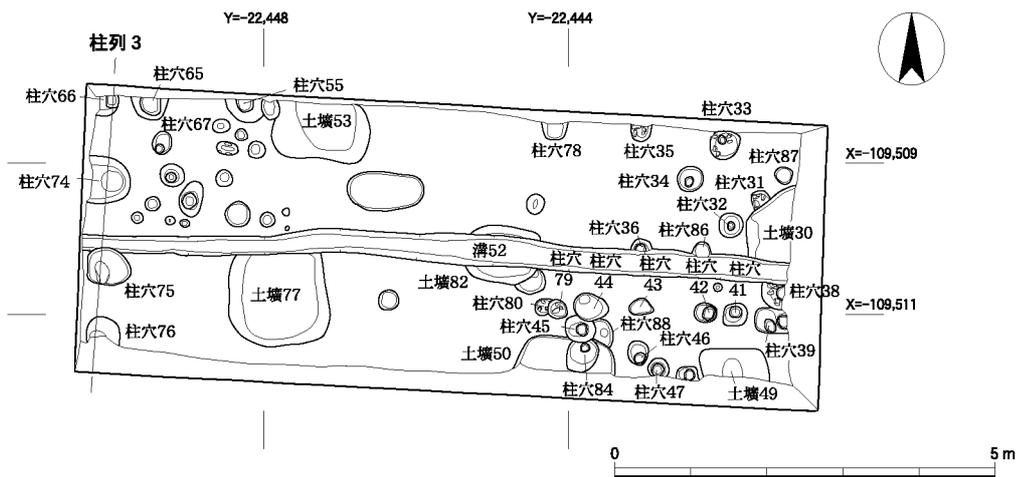


図9 第3面遺構平面図(1:100)

23・40層)にて、溝52や多くの土壇・柱穴を検出した。調査地が狭く、建物の復元はできなかった。柱穴には、礎石を持つ柱穴75を検出し、南北方向の柱列3を検出した。それぞれの遺構からは、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が少量出土した。

溝52 東西方向の溝で、検出した長さ9.8m、幅0.5m、深さ0.3mほどで、西から東へ向かって0.2m低くなる。室町時代の遺物が出土したが、第3面の他の遺構と異なり、埋土は柔らかで、桃山時代か江戸時代の二条城が築城された頃まで時代が下がる溝の可能性はある。

土壇77 約1m四方の方形で、深さ0.1m、溝52に切られる。埋土から、多くの土師器皿が出土したが、ほとんどのものが細かくひび割れていた。その中で、細かく割れていたが、原形を保つ室町時代の土師器皿が出土した。

柱列3 柱穴75は一边0.4mで、一边0.3mの礎石が残っている。柱穴76・75・74・66は、約1m間隔で南北に並び、調査区外に続くものと思われる。礎石のある大きめの柱穴であり、建物の可能性がある。柱穴66・74・75からは室町時代の遺物小片が出土し、柱穴76からは鎌倉時代の遺物が出土した。

(5) 第4面 平安時代(図10)

第3面の整地層を掘り下げ、調査区東半で柱穴88と、暗褐色砂泥層(図6-25・47層)を肩とする溝90を検出した。

柱穴88 溝90の埋土に掘り込まれている。埋土から平安時代末期の土師器皿が出土した。第3面の他の遺構と切り合いがあり、第3面より古い時代で、溝90よりも新しい時代に属する。溝90の埋土に掘り込まれており、冷然院が衰退して、池が埋められた後の、平安時代後期以降の遺構と考えられる。

溝90(図12) 検出した長さ約5m、幅約1m、深さ0.2mを測り、北東から南西方向に流れていたようで、北壁での底面標高は39.7mで、底面はわずかに南方に低くなる。遺物は小片だけで、時期不明であるが、調査地は冷然院内の北東隅に位置する。2000~2001年度の二条城内の調査

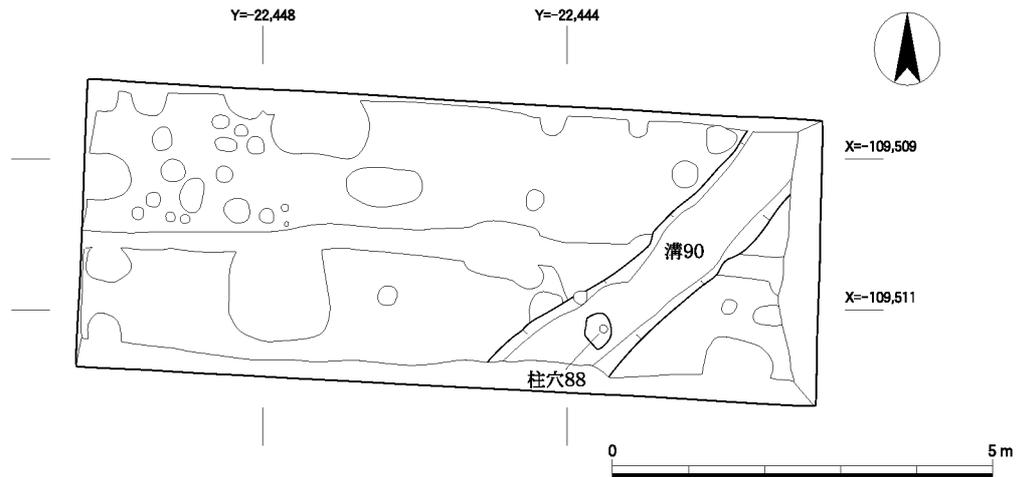


図10 第4面遺構平面図(1:100)

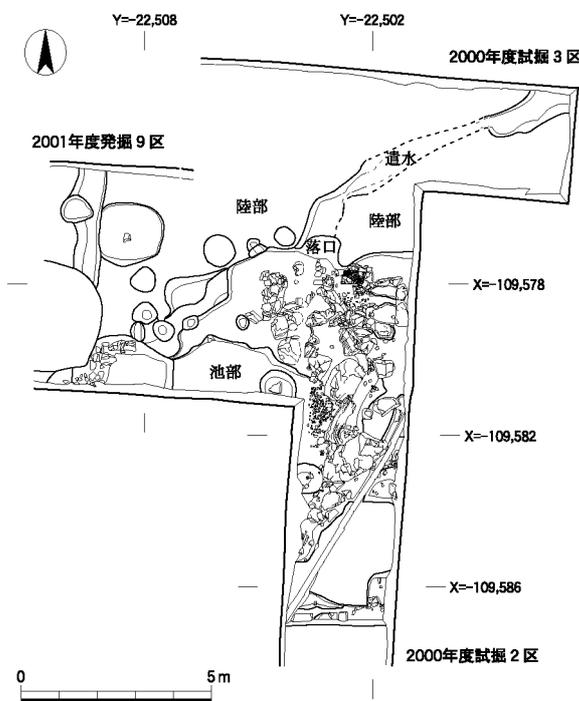


図11 調査6-試掘2・3区平面図(1:200)



図12 第4面東半 溝90(西から)

(調査6)の試掘2・3区は、冷然院の池跡と、その池への遺水を幅1m前後、深さ0.2~0.1m前後、底面標高は39.2~39.0mで検出している(図11)。今回の調査地の南西方向に80m離れているが、規模や標高などからみて連続する可能性がある。

(6) 第5面 平安時代(図13、図版2-3)

第4面の溝90や、整地層を掘り下げ、無遺物層の砂礫の多い黒褐色砂泥層(図6-26・27・29層)まで掘り下げ遺構検出を行った。柱穴や土壌を検出したが、調査地が狭く、遺構の性格については不明である。遺物は微片のみで、時期は不明確である。冷然院内の北東隅にあたり、生活の場から離れていたため、遺物がほとんど出土しないとも考えられる。

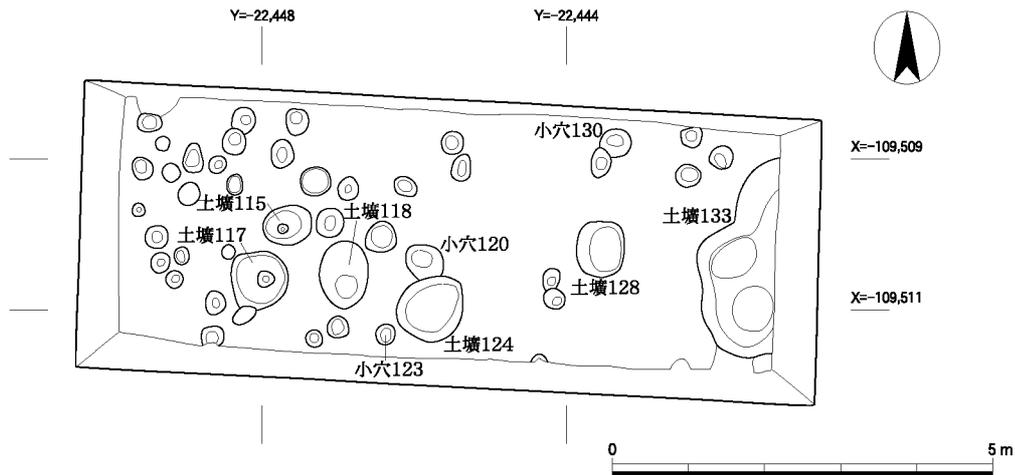


図13 第5面遺構平面図(1:100)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

平安時代から江戸時代の遺物を整理箱にして11箱分出土した。遺物の内容は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、金属製品、石製品などがある。

平安時代の遺物は、土師器皿、須恵器(杯・甕)、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦があるが、遺構にもなって出土したのは、極小片の土器類のみである。第3面柱穴88からは平安時代後期の土器が、大きめの破片で出土した。その他の土器類は小片で、第3面や第2面のその他遺構などに混入遺物として少量出土した。

鎌倉時代の遺物は、土師器皿が数点、第3面の柱穴39・41から出土した。その他には、小片が江戸時代の遺構に混入して出土している。

室町時代の遺物は、土師器皿、瓦器椀、天目椀、磁器椀などが出土した。いずれも小さな破片

表1 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦	12箱	土師器1点	1箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、輸入磁器		土師器7点	1箱	0箱
江戸時代	施釉陶器、焼締陶器陶器、染付磁器、瓦、金属製品		施釉陶器4点、染付磁器2点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点	9箱	0箱
合計		12箱	16点(1箱)	11箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

で江戸時代の路面構築土から出土した。第3面の遺構や土壌77の土師器皿は、原形を保ちつつ、粉々に細かく割れていた。第2面の路面を構築するとき大きな圧力がかかったため、原形を保ったまま粉々になってしまったと考えられる。

江戸時代前半の遺物には、瀬戸・美濃産の施釉陶器椀、丹波産や信楽産の焼締陶器鉢・壺が、路面1層の構築土に混入して出土している。

江戸時代の遺物は、路面や各遺構から出土しているが、多くは第1面路面構築土から出土している。京・信楽産、瀬戸・美濃産、肥前系の施釉陶器（皿、椀、蓋、鉢、灯明具、土瓶）備前産や信楽産の焼締陶器（鉢、搦鉢、鍋）、肥前系・瀬戸・美濃産の染付磁器（椀、蓋、小杯）、瓦（軒丸瓦、軒平瓦）、埴塼片、金属製品などがある。柱穴や路面から出土したものは小片が多い。多くは江戸時代末期・19世紀中頃のもので、中に17・18世紀の陶磁器類が混入する。

明治時代の遺物として、京・信楽産、瀬戸・美濃産の施釉陶器（椀）、ガラス（瓶・蓋）、銅銭（明治三十年の五銭銅貨）、石墨などが溝3から出土した。溝4からも明治期の遺物が混入して出土しているので、路面6と溝4は幕末から明治期まで利用されていた可能性がある。

（2）土器類（図14・15、図版3）

1は土師器皿で、口径9.8cm、器高1.4cm。調整はオサエとナデ。柱穴88から出土した。平安京・京都 ~ 戴期の編年案⁷⁾では、平安時代後期 期に属する。第3面は中世の遺構が多いので、混入遺物の可能性が高いが、冷然院が衰退していく過程での遺構の可能性もある。

2は土師器皿で、口径9.0cm、器高1.4cm。調整はオサエとナデ。柱穴39から出土した。鎌倉時代 期に属する。

3は土師器皿で、口径8.4cm、器高1.8cm。調整はオサエとナデ。第3面掘り下げ土から出土した。鎌倉時代後期 期に属する。

4は土師器皿で、口径8.0cm、器高1.6cm。調整はオサエとナデ。柱穴41から出土した。鎌倉時代後期 期に属する。

5～8は土師器皿で、いずれも土壌77から出土した。5は口径10.6cm、器高2.0cm。6は口径14.1cm、器高2.7cm。7は口径9.2cm、器高1.7cm。完形。内外面に炭化物が付着する。8は大型の皿で、口径16.2cm、器高2.2cm。調整はいずれもオサエとナデ。室町時代後期の 期に属する。この土壌からは、粉々にひび割れていたが、原形をとどめた土師器皿がまとまって多量に出土している。

9～14は路面6層の下の構築土から出土したもので、江戸時代末期・19世紀中頃のものである。このことから、路面6層の構築時期は、古くて江戸時代末期、ということが明らかとなった。

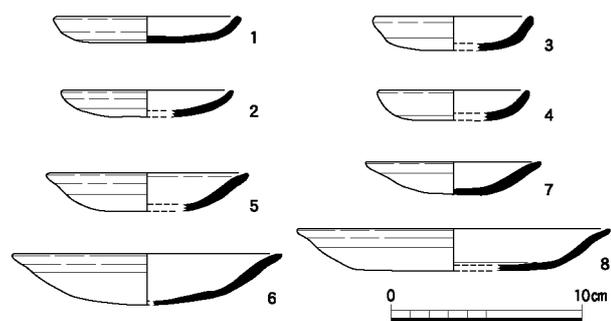


図14 土器実測図1（1：4）

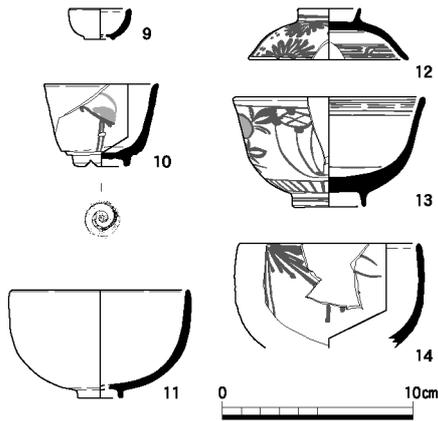


図15 土器実測図2(1:4)

9はミニチュアの椀で、口径3.3cm、高さ1.6cmと小さな施釉陶器椀である。伏見・深草産。

10は施釉陶器の小杯で、口径6.0cm、器高43.5cm。外面に鶴の文様。内面にヘラケズリの跡が残る。割高台の底部には渦巻き状のヘラケズリ。信楽産。

11は施釉陶器の丸椀で、上絵が剥落している。18世紀後半以降の京焼きである。

12は染付蓋で、口径8.4cm、器高2.7cm。瀬戸・美濃産。19世紀中頃のものである。

13は染付椀で、口径10.1cm、器高5.8cm。端反りで外面に花模様。産地不明。

14は陶器椀で、口径9.4cm、残存器高5.5cm。外面にヘラケズリの跡が残る、その上にサビ絵の注連縄文が描かれる。京・信楽産。

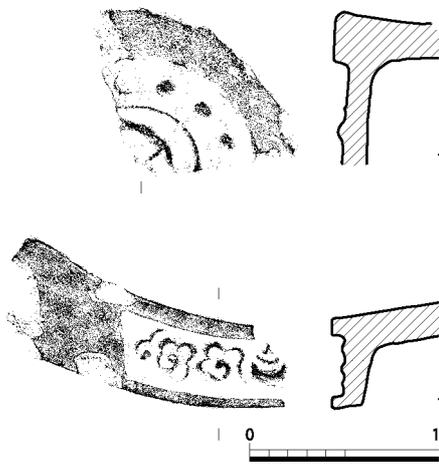


図16 軒瓦拓影・実測図(1:4)

(3) 瓦類(図16、図版3)

瓦は主に路面6の下の路面構築土から出土している。布目やタタキ文様の残る平安時代と思われるものから、江戸時代までの瓦が出土しているが、いずれも小片で、軒瓦は以下の2点だけである。

15は軒丸瓦で、時計回りの右巻きの巴文である。磨滅しているが、瓦当裏面はヨコナデ、丸瓦上面はタテケズリとナデ。江戸時代。

16は軒棧瓦で、小丸のつかないものである。中心飾りに宝珠文で、両側に唐草文が雲様に巡る。瓦当面にキラコ。瓦当周縁はナデ、平瓦上面はタテケズリとナデ。江戸時代。

5.まとめ

調査地は、縄文時代から弥生時代の集落跡の二条城北遺跡の南端に位置する。平安時代は二条大路の北、大宮大路東の左京二条二坊に4町を占めた冷然院内の北東に位置する。中世には、聚楽廻南辺を形成する地域であった。近世には、二条城を中核とした京都所司代屋敷など幕府の役所などが建てられており、この地域一帯は、京都における官庁街として機能していた。二条城北遺跡に関連する遺構・遺物は検出されなかったが、平安時代以降の歴史変遷を裏付けるように、1・2次調査に引き続き、平安時代から中世、近世にわたる3時期5面の成果が得られた。

平安時代には、溝90を検出している。調査6で検出された平安時代の冷然院の池にともなう遣水遺構は幅約1m前後、深さ約0.2m前後と同様の規模を測ることから、この溝90は遣水の上流部

分の可能性がある。

鎌倉時代から室町時代にはしっかりした整地層上にて溝や多くの柱穴を検出した。調査地が狭く、建物の復元はできなかった。遺物は少ないが、遺構からは鎌倉時代、室町時代の遺物が出土しており、冷然院の廃絶後、二条城が創建されるまでの中世の遺構を確認した。

江戸時代には、寛永期の後水尾天皇の行幸以来、上面に白砂を載せて丹念に整地された路面を第1調査と同様に確認した。この路面は江戸時代末期まで使用されており、今回調査区部分では、側溝や埦は設置されていないことが判明した。さらに、江戸時代末期から明治時代の路面と側溝、絵はがきにあるような埦跡を確認できた。

以上、今回の調査では、調査地の面積が狭く推定の域を出ない部分もあるが、冷然院の遺水と思われる溝と、江戸時代二条城造営時の路面のあり方から、江戸時代末期以降の二条城北側の土地利用変遷が確認できた。

註

- 1) 大立目 一 『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査概報 2002-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 2) 尾藤徳行 『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮廩院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 3) 上村和直・吉崎 伸「左京二条二坊（2）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財研究所調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4) 関西文化財調査会
- 5) 田中利津子「平安宮宮内省跡」『平成13年度 京都市内遺跡発掘調査概報』京都市文化市民局 2002年
- 6) 平田 泰 『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 7) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゅうにじょうりきゅう (にじょうじょう)・へいあんきょうれいぜいいんあと							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)・平安京冷然院跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-16							
編著者名	尾藤德行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゅうにじょうりきゅう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 たけやまちどおりほりかわ 竹屋町通堀川	26100	A453	35度 00分 45秒	135度 45分 15秒	2006年1月 6日～2006 年3月1日	38㎡	公共下水道管布設 工事
へいあんきょうれいぜいいんあと 平安京冷然院跡 にじょうじょうきたいせき 二条城北遺跡	にしいるにじょうじょうちよう 西入二条城町	238						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	平安時代	溝・柱穴	土師器・須恵器・緑釉 陶器・灰釉陶器		南西の冷然院の池 と遺水に続く可能 性がある。		
平安京冷然院跡 二条城北遺跡	都城跡 集落跡	鎌倉時代～ 江戸時代初頭	柱穴・土壇・溝	土師器・瓦器・陶器		鎌倉時代から室町 時代の柱穴・土壇 ・溝を検出した。		
		江戸時代	路面・側溝・柵列	陶器・磁器・瓦・金属 製品		旧竹屋町通の江戸 時代末期までの道 路状態、末期以降 の道路・溝・埒の 状況を確認。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-16

史跡二条離宮(二条城)・
平安京冷然院跡

発行日 2006年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961